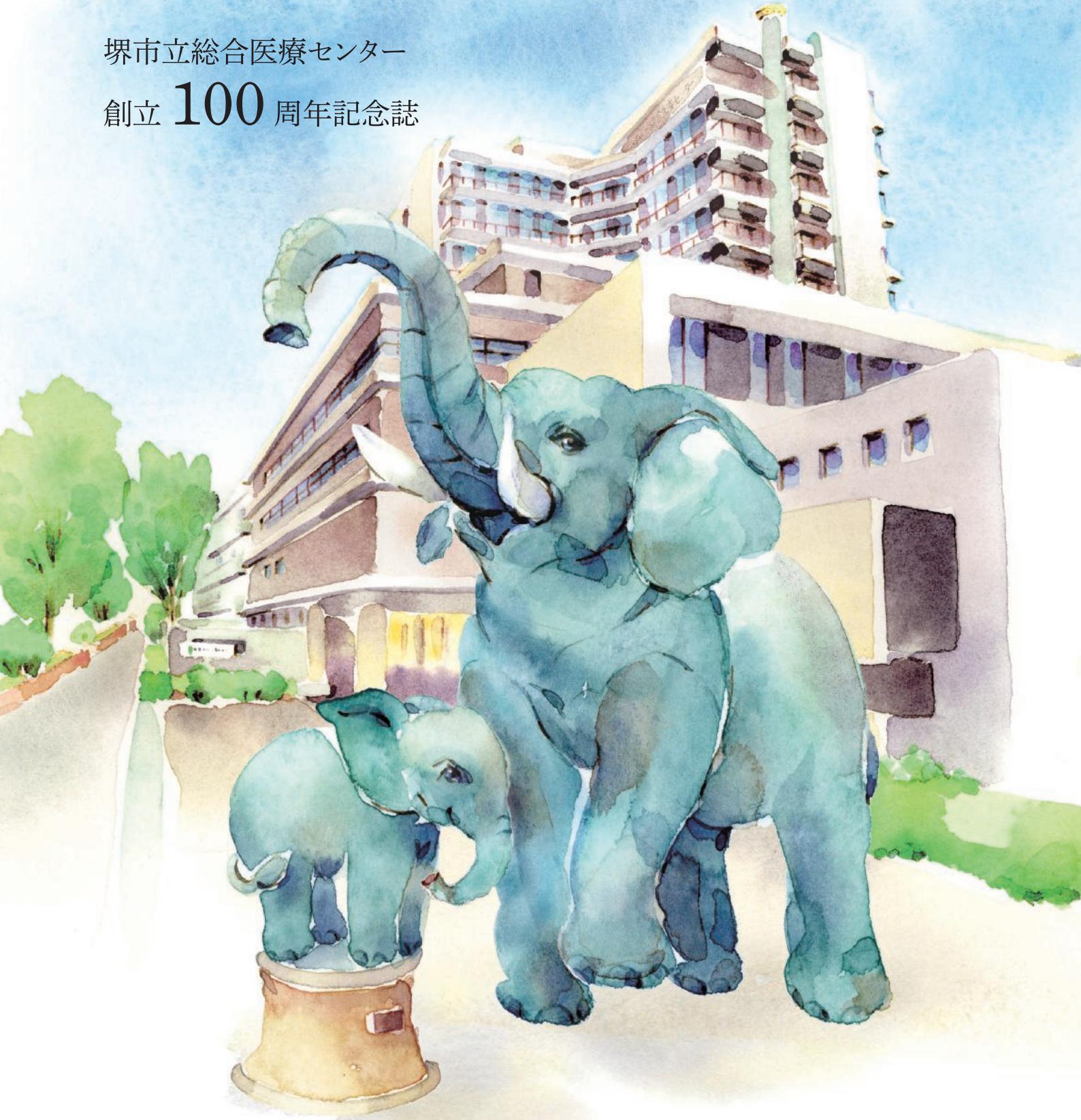




笑顔をもっと 健康をずっと

堺市立総合医療センター

創立 100 周年記念誌



■ 創立100周年を迎えて

今から100年前の大正12年7月1日、宿院町東3丁の顕本寺境内に、内科、外科、産婦人科、放射線科の4科をもって「堺市立公民病院」が開設されました。健康保険制度がまだ整備される前の病院で、一般市民には実費診療を、生活困窮者には無償で医療を提供することを目的としたものであったそうです。そして、この度、創立100周年の記念すべき年を迎えることができました。これも偏に皆様方のご支援とご協力の賜物で、心より感謝申し上げます。

さて、このように始まった病院の歴史は、決して平坦なものではありませんでした。開院から規模を拡張しつつ、昭和8年には小児科を増設し「市立堺市民病院」と改称しましたが、その翌年、火災により全焼、その後開設した臨時診療所もその年の室戸台風により大きな被害を受けました。昭和13年、宿院町西2丁に病院を再建ましたが、昭和20年7月10日の堺大空襲により病院は建物の一部を残したものの大半全壊となりました。それでも、3か月後には一部復旧して診療を再開したことあります。

昭和26年4月には、新館の完成を機に名称を「市立堺病院」と改め、その後も診療科の増設や病床の増床のために増改築を重ね、診療内容の充実、向上が図られました。その地で約45年間診療を続けておりましたが、施設の老朽化も進んだため、南安井町への移転が計画されました。その工事中、平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災により、建設中の病院の耐震構造を見直す必要が生じ、計画が一部変更されました。

更に、移転直前の平成8年7月12日には、夜間診療時に下痢、血便を主症状とする学童10人が受診され、腸管出血性大腸菌O157による集団食中毒と判明しました。引き続き、外来待合は症状を訴える患者で溢れかえり、重症者が入院する病室もすぐになくなる様な状況だったそうであります。

同年10月に南安井町1丁へ移転をした後は、地域の中核病院として、政策医療や高度専門医療など幅広い診療領域の医療を順調に提供してきましたが、政令指定都市である堺市に三次救急医療を担う施設がないということで、多くの重症患者が市外へ搬送されなければならない状況がありました。そこで、救命救急センターの整備や病院の経営形態の見直しなどの検討が重ねられ、平成24年に地方独立行政法人化、平成27年7月には現在の地に移転し、堺市で初めて救命救急センターを備えた新しい病院を構えることができたのであります。

このように病院の歴史は確かに苦難に満ちたものでしたが、医療全体に目を向けてみると、この間のわが国の近代医学の進歩には素晴らしいものがありました。

抗菌剤をはじめ各種薬剤、診断技術、CT・MRI等の大型診断機器、拡大手術から縮小手術手技、内視鏡手術からロボット手術手技等の開発、更にはヒトゲノムの全塩基配列の解読からゲノム技術の実地臨床への応用等々が挙げられます。100年という時間軸全体を通してこれらの技術の進歩を見てみると、この間は、個別の病気、臓器あるいはゲノムを対象とした技術革新が飛躍的に進んだ一方で、病人あるいは一人のヒトを全体として捉えること、更には病気を社会全体の中で捉え対応していく視点が徐々に薄れてきているように感じられるのではないでしょうか。ちょうどそのようなタイミングで、新型コロナウイルス感染症パンデミックが発生したのですが、当法人では、このパンデミックを体験する前の令和元年の段階から、これらにポイントを置き、これから未来に向けて求められる医療をめざし、令和2年度から始まった第3期中期計画に、健康に関する情報を発信する「疾病予防管理センター」的な機能を一つの目標として盛り込んでいたところであります。その発想が的中したかのような今回のパンデミックの発生とも言えるかも知れません。これからの新しい100年に向け、これまでにはなかった新しい堺市の医療体制作りのシステムイノベーションをめざしていく必要性を強く感じている今日この頃であります。

我々は、創立100周年のこの機会に過去の歴史を振り返り、反省し、検証して、これからの新しい100年に向けての公立病院のあるべき姿を市民の皆さんと共に考えていきたいと思います。どうぞご協力よろしくお願ひいたします。



地方独立行政法人
堺市立病院機構

理事長 門田 守人

■これまでの100年を振り返り、 これからの100年に思いを繋ぐ



当院が「堺市立公民病院」として開設された大正12年は、大正7年に第一次世界大戦が終了し、景気が上昇していた時代から世界恐慌に向かいつつある複雑な時代であったようです。

産業の成長とともに人口が都市に集中するも、

職場や住環境が不十分で、上下水道の整備も追いつかず、きわめて不衛生で低栄養の状態が蔓延し、一般市民のなかでは結核や脚気などの疾病が拡大しました。そのような時代の要請から堺市が顕本寺の境内に当院の前身の「堺市立公民病院」を設立しました。この名称は、public hospitalの和訳と言われています。その後の病院は、火災での全焼、室戸台風による被災、堺大空襲といった数々の苦難を乗り越え、昭和26年に宿院町西の「市立堺病院」となりました。昭和28年に創立30周年を迎えた際に「堺病院の歌」が創られましたが、その歌詞に『地の塩の尊き使命われら高くつねに正しくいたつきの床に病み伏すものに施さん』とあります。「地の塩」とはイエス＝キリストの言葉で、腐敗を防ぐ塩のように社会や人身の模範として社会に奉仕するものを意味しています。医療者、病院の職員として忘れてはいけない精神であると思っています。

私も、大学を卒業1年後の昭和58年より3年間研修医としてこの宿院町西の病院で研修しました。病院前のフェニックス通りで椰子の木立ちが風になびき、少し潮の香りがする雰囲気がありました。院内の天井にはたくさんの配管が走っており、ちょっと古い病院だなという感じでしたが、そこで働く職員や患者さんはとても優しく、熱心で活気にあふれていました。その頃から、当時、外科部長をされていた里見先生が新病院移転の話をされていたことを思い出します。

平成8年に老朽化した宿院町西の病院から南安井町の8階建ての最新の設備を整えた新病院に移転するのですが、その直前に市立小学校の給食による食中毒が発生し、多数の患者の診療に当たりました。南安井町の病院には、母と子をテーマにしたさまざまな動物の彫刻が建物の周りに配置されていました。その中のゾウの親子は、現病院に移設し当院のマスコットとなっています。

平成27年には、政令指定都市堺市として救命救急センターを整備するにあたり西区家原寺町に移転し、現在に至っています。令和元年12月に中国武漢で新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の第1例目が報告されてから、数か月で世界的な流行となりました。令和2年2月に当院もダイヤモンド・プリンセス号の乗客の陽性患者3名を受け入れました。その後、最大で許可病床数の15%にあたる72床をCOVID-19対応の病床として確保し、これまでの3年間に、重症患者230名を含む1,600名余りのCOVID-19陽性患者の入院治療を行いました。当初、未知の感染症であったにもかかわらず、当院の職員は「堺市民のために、地域のために」を合い言葉に自らの感染のリスクや自分の仕事が制限されるなどいろいろな苦難を乗り越えてCOVID-19に対応してきました。フェーズ毎の病床確保、発熱外来の開設、高齢者施設への医療介入、年末年始の検査診療枠の開設、救急搬送困難事案に対する当番表の作成など職員一丸となってここまでやってまいりました。このような時期に創立100周年を迎えることは不思議な巡り合わせを感じます。

当院の創立から1世紀が経過し、社会も医療も隔世の感があります。院長も私で18代目となり、多くの諸先輩方の努力と熱意が今の職員にも引き継がれているものと思います。たとえ医学が進歩し、DXが進もうと、堺病院の歌にある『地の塩』の心を忘れることなく、市民の健康福祉に貢献できる病院であり、堺市立総合医療センターの一職員でありたいと改めて決意するところです。

これからの日本は前例のない少子高齢社会に突入します。これまでの幾多の困難を克服してきた当院の伝統を思い起こし、「ものの始まりなんでも堺」のチャレンジ精神で、職員一同、堺市及び堺市民に向けて信頼される医療を提供していきたいと考えております。



地方独立行政法人
堺市立病院機構
堺市立総合医療センター

院長 大里 浩樹

■ 祝　辞

堺市立総合医療センターは大正12年7月に堺市立公民病院として開院し、今年で100周年を迎えました。

府内の公立病院の中でも長い歴史を持つ病院の一つとして、一世紀にわたり市民の皆様の命と健康を守るため、信頼できる医療の提供に努めてきました。志高く、研鑽を重ねてこられた歴代院長をはじめとする職員や関係者の皆様に深く敬意を表します。



市立堺病院は平成8年に診療領域を救急医療や高度専門医療にも広げ、平成24年には機動的で柔軟な運営を目的に地方独立行政法人に移行、平成26年にがん診療に対する取組が認められ厚生労働省より「地域がん診療連携拠点病院」に指定されました。

平成27年に現所在地に移転・改称した「堺市立総合医療センター」では、堺市域初となる救命救急センターを設置し、平成30年からは大学病院本院に準ずる病院として「DPC特定病院群」に指定されるなど、各分野において質の高い医療を提供しています。

また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大時には、感染症指定医療機関として専用病床の確保や診療体制を構築するなど、本市の中核を担う病院として役割を果たしました。

堺市では、市政運営の大方針である「堺市基本計画2025」の重点戦略に「人生100年時代の健康・福祉」を掲げ、すべての人がいつになっても心身ともに健康で、輝きながら暮らし続け、充実した生活を送ることができる都市をめざしています。

超高齢社会が進行する中、団塊の世代が75歳以上となる2025年を見据えて、住み慣れた地域で安心して健康で暮らしていただけるように、かかりつけ医から高度医療までつながる地域医療体制の構築に注力しています。

本市唯一の公立病院である堺市立総合医療センターには、救急医療、小児医療、周産期医療などの分野において地域の医療機関との役割分担のもと中心的な存在として市民の皆様の健康維持や健康寿命の延伸に貢献することを望みます。

また、近い将来に発生が懸念される南海トラフ巨大地震や上町断層帯地震などの災害時には災害拠点病院として迅速かつ的確に対処し、さらに新たな感染症発生時には行政や関係機関と連携して速やかな患者の受け入れ体制を整備するなど、市民の皆様の生命を守り、安全で安心な都市の実現に寄与することを期待しています。

今後も、堺市立総合医療センターが南大阪地域における医療の拠点として益々発展し、市民や関係機関の皆様から一層信頼される病院となるよう心より祈念いたします。

堺市長

永藤 英機

病院概要

令和5年7月現在

理念

すべての患者さんの権利と人格を尊重し、安心・安全で心の通う医療を提供します。

憲章

- 一、思いやりとふれあいの心がかかる人間尊重の医療サービスを提供します。
- 一、安心と満足を与え、信頼が得られる医療サービスを提供します。
- 一、医療機関との連携を基本として、きめ細かい医療サービスを提供します。
- 一、常に医療水準の向上に努め、専門的かつ高度な医療サービスを提供します。
- 一、地域の中核病院としての役割を認識し、効果的で効率的な医療サービスを提供します。

診療科

内科／消化器内科／循環器内科／呼吸器内科／腎臓内科／糖尿病・内分泌・代謝内科／リウマチ科／膠原病内科／血液内科／脳神経内科／感染症内科／緩和ケア内科／外科／心臓血管外科／消化器外科／乳腺・内分泌外科／呼吸器外科／脳神経外科／整形外科／形成外科／産婦人科／小児科／眼科／耳鼻咽喉科／頭頸部外科／皮膚科／泌尿器科／歯科口腔外科／放射線治療科／放射線診断科／麻酔科／臨床検査科／病理診断科／リハビリテーション科／救急科

病床数

一般 480床、感染症 7床

各種指定等

保険医療機関	母体保護法指定施設
労災保険指定医療機関	児童福祉施設(助産施設)
DPC特定病院群	地域がん診療連携拠点病院
地域医療支援病院	がんゲノム医療連携病院
生活保護法等に関する指定医療機関	大阪府肝炎専門医療機関
救急医療機関	感染症指定医療機関(第一種、第二種)
大阪府指定三次救急医療機関	結核指定医療機関
臨床研修指定病院	エイズ診療拠点病院
外国人医師修練施設	新型インフルエンザ等対策特別措置法指定地方公共機関
外国医師歯科医師臨床修練指定病院	被爆者一般疾病医療機関
災害拠点病院	管理栄養士を置かなければならない特定給食施設
難病の患者に対する医療等の指定医療機関	大阪府外国人患者受け入れ地域拠点医療機関
大阪府難病診療連携拠点病院	不在者投票施設
大阪府小児地域医療センター	日本医療機能評価機構認定病院
指定小児慢性特定疾病医療機関	卒後臨床研修評価機構認定病院
指定自立支援医療機関(精神通院医療)	性暴力救援センター・大阪(SACHICO<サチコ>)協力医療機関
指定自立支援医療機関(育成医療・更生医療)	新型コロナウイルス感染症重点医療機関



病院の沿革 100年の歩み

【歴代院長】



初代院長
(大正12.6~昭和8.5)
金井 徳二郎

1923
(大正12年)

1923年(大正12年) 7月

宿院町東3丁 頤本寺境内に堺市立公民病院を開設



創立時の堺市立公民病院



二代院長
(昭和8.5~昭和9.8)
南 廣憲

1930
(昭和5年)

1933年(昭和8年) 5月

市立堺市民病院と改称

1934年(昭和9年) 6月

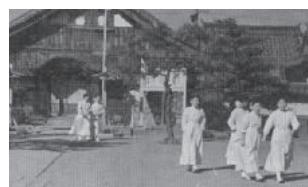
火災により焼失

7月

材木町東3丁 妙国寺境内に臨時診療所を開設

9月

室戸台風による関西大風水害にて臨時診療所被災



妙国寺の臨時診療所時代
(昭和10~12年ごろ)



三代院長
(昭和10.1~昭和11.1)
武 鈺宜

1938年(昭和13年) 9月

宿院町西2丁に市立堺市民病院を再建



市立堺市民病院復興落成記念絵はがき
(昭和13年)



四代院長
(昭和11.1~昭和26.4)
樋口 巖

1940
(昭和15年)

1944年(昭和19年) 9月

市立堺市民病院の木造建築物
強制疎開のため撤去

1945年(昭和20年) 7月

戦火による損傷が甚だしく、府立堺中学校
(現府立三国丘高等学校)内に仮診療所を設置



五代院長
(昭和26.4~昭和35.4)
牧野 寅三

1945
(昭和20年)



堺空襲後の大道筋の阪堺線
左側の鉄筋ビルが堺病院(昭和20年)

【歴代院長】



六代院長
(昭和35.12～昭和48.2)
王子 喜一

1950
(昭和25年)

1945年(昭和20年) 10月 東館が復旧、診療を開始



戦災による病院復旧作業
(昭和21年8月)

1951年(昭和26年) 3月 中館増築工事竣工



4月 市立堺病院と改称

1957年(昭和32年) 4月 西館及び併設伝染病棟竣工
8月 医療法に基づく総合病院となる



病院全景(昭和33年12月)



七代院長
(昭和48.3～昭和54.3)
西野 信夫



八代院長
(昭和54.4～昭和60.3)
渡邉 直寛

1970
(昭和45年)

1970年(昭和45年) 2月 救急告示病院に認定
1972年(昭和47年) 4月 臨床研修病院に指定



リニアック



血管連続撮影装置



お薬お渡し窓口



九代院長
(昭和60.4～昭和62.3)
柳谷 幸敏



十代院長
(昭和62.5～平成6.3)
湯浅 亮一

1979年(昭和54年) 3月 市立堺病院運営審議会より
「市立堺病院の運営のあり方について」の最終答申
1988年(昭和63年) 7月 市立堺病院新築計画基本構想策定

病院の沿革 100年の歩み

【歴代院長】



十一代院長
(平成6.4～平成7.12)
松永 亨

1995
(平成7年)

- 1995年(平成7年) 1月 阪神・淡路大震災発生 医療救護班派遣
1996年(平成8年) 3月 市立堺病院憲章制定(10月施行)
7月 腸管出血性大腸菌O157診療に対応
10月 南安井町1丁に新病院を開設



十二代院長
(平成8.5～平成11.3)
木谷 照夫

2000
(平成12年)

- 1997年(平成9年) 3月 災害拠点病院に指定
1998年(平成10年) 3月 日本医療機能評価機構による認定
2000年(平成12年) 7月 病院ボランティア制度導入
2003年(平成15年) 10月 新医師臨床研修制度による管理型臨床研修病院に指定
2004年(平成16年) 10月 電子カルテ本格稼働
2007年(平成19年) 1月 DMAT(災害派遣医療チーム)登録配備



DMAT訓練(平成19年)



十三代院長
(平成11.4～平成14.3)
里見 隆

2010
(平成22年)

- 2011年(平成23年) 3月 東日本大震災発生 DMAT派遣



十四代院長
(平成14.4～平成16.3)
岡田 伸太郎



十五代院長
(平成16.4～平成24.3)
吉河 洋

- 6月 ドクターカー運用開始



【歴代理事長】



初代理事長
(平成24.4～平成28.3)
北村 熊一郎

【歴代院長】



十六代院長
(平成24.4～平成28.3)
金万 和志

2012
(平成24年)

2012年(平成24年) 4月

地方独立行政法人へ移行
地方独立行政法人堺市立病院機構
市立堺病院と改称



2015
(平成27年)

2014年(平成26年) 8月

地域がん診療連携拠点病院に指定

2015年(平成27年) 7月

西区家原寺町1丁へ移転
地方独立行政法人堺市立病院機構
堺市立総合医療センターと改称



7月 三次救急医療機関に認定
手術支援ロボット
「da Vinci(ダビンチ)XI」導入

2016年(平成28年) 4月

熊本地震発生 DMAT派遣
卒後臨床研修評価機構(JCEP)
による認定

2018年(平成30年) 4月

DPC特定病院群(大学病院本院に
準ずる機能を有する)に指定



二代理事長
(平成28.4～現在)
門田 守人



十七代院長
(平成28.4～令和2.3)
花房 俊昭

2020
(令和2年)

2020年(令和2年) 2月

新型コロナウイルス感染症対策本部設置
新型コロナウイルス感染症入院患者初受入



COVID-19への対応(令和2年)

4月 疾病予防管理センター設置

2022年(令和4年) 3月 臨床検査の国際規格ISO15189認定



十八代院長
(令和2.4～現在)
大里 浩樹

2023
(令和5年)

2023年(令和5年) 7月

創立100周年

「笑顔をもっと 健康をずっと」

今回、創立100周年を記念して、門田理事長と将来を担う若い職員を交えた記念座談会を開催しました。これからも、市民の皆さんのがんばりで笑顔の絶えない生活のために、次の100年に歩み出す節目にあたって、現在までのことを振り返り、未来を考える貴重な機会となりました。

谷口 皆さんには、「人の役に立つ」「相手の立場に立つ」といった、変わらず大切に思っていることがあると思いますが、それを踏まえて、「わたしたちの変える力 わたしたちの変わらない心」というテーマで、お話を進めていければと思います。

門田 皆さんは普段、医療者として患者さんに接していますが、逆に自分が患者になった時に何を求めるか、という視点に立って、“医療現場における人間力”的本質を考える必要があると思います。

藤原 確かに、機器の性能や技術は上がりましたが、患者さんときちんとコミュニケーションを取って、協力を得られないと正確な検査はできない、と最近、改めて思います。

江坂 私が看護師として感じるのは、患者さんが大切にしている人、家族の力の大きさです。その存在に気付けるかどうかも大事な部分だと感じます。

畠 食事指導の際にも、家族に同席してもらうことが多いですが、不快に感じない言葉使い、話し方、聞き方には普段から気を付けています。

門田 本来は、“たまたま医師になった人”と“たまたま患者になった人”的関係であって、ちょっと立場が違うだけ。結局は人間同士、重なり合う関係で、お互いの理解、許し合いといった機微が分かる人間になれるかどうかが医療者として最も大切なことだと思います。

中野 医療者と患者さんは、最後に亡くなることまでも含めての関係ですから、人として立場を超えて、お互いのことを一緒に考える姿勢は大事だと感じます。

門田 「生老病死に悩む人間の伴侶であることが、医療者の使命で誇り。単なる技術者、科学者であってはならない」という医療の本質は、1000年以上も変わっていません。ただ技術が急速に進んで、いまや医療の対象が患者さんではなく病気そのものになり、社会全体に目が届かなくなっている感があります。本当に大切なのは、医療の技術的な革新でなく、社会の中に医療システムをどうつくるか。図らずもコロナ禍によって、地域全体で医療体制を作ることの重要性が浮き彫りになりました。もっと言えば、病気になる前の予防医学が必要になりますが、それは今までとは違う視点で取り組むべきこと。社会医学のような広範なシステムそのもののイノベーションは、これから大きな課題ですね。

中野 当院にも疾病予防管理センターができましたが、予防医学に力を入れることで、患者さん自身が病気を早期発見したり、日常で健康意識を持ったりといったことを周知するには、より広い視野が必要になります。

宇野 今後、医師が不足するといわれている現状、技術を身に付ける人が限られ



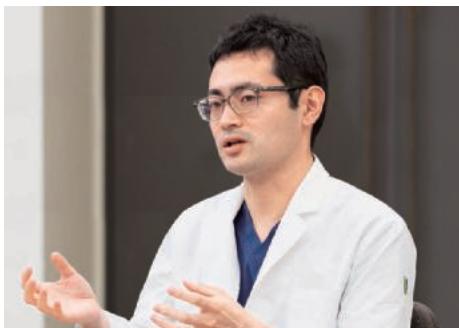
理事長 門田 守人



理事 谷口 孝江



救命救急科 医師 天野 浩司



呼吸器内科 医師 中野 仁夫



8東病棟 看護師 江坂 奈美

ている中で、知識をスタッフとシェアすることで一緒に患者さんを診るという、現場の共有も求められていると感じます。

安藝 院内の事務的なやりとりにもコミュニケーションが伴っていないと、患者さんと接する時にうまくいかない。何をするにも人のつながりは大切だと思います。

門田 人間同士、うまくコミュニケーションを取る方法を考える、その延長に医師と患者さんの関係もある。「変えてはならないもの」というのは、そういう関係性を続けていくこと。それこそ、医療における基本中の基本ではないですか。

江坂 その意味では、人生100年時代と言われる中で、“その人らしく生きたい”という希望を引き出すコミュニケーションをしていきたいです。

中野 100年後というと今とは状況が全く違いますが、どの時代でも求められる役割を全うすることが大事なのではと思います。

天野 地域、医療機関だけでなく行政、産業の分野と連携を取りつつ、社会全体に求められているものを考えながら行動すれば、自ずと良い形に変わっていくと想像します。

橋本 今、共育・育成サポートセンターでは、お互いに成長できる場作りというテーマのもと様々な試みを行っています。お互いを知ることで、より良い医療につながる場を病院全体に広げていきたいです。

宇野 コロナの影響もあり、会話の機会も減っている中で、もっとスタッフが力を発揮できる関係性を考える良い機会になりました。

安藝 次の100年は、私たちの子・孫が生きる時代。人間同士の心通う社会であってほしいし、それを発信できる病院になれたらと思います。

谷口 その意味でも、患者さんの立場に立って、この病院のあるべき姿を常に考えていくことが大事だと思います。最後に門田先生から、エールをいただけますか。

門田 否応なく、世の中は変わります。福沢諭吉は、世の流れを変えるのは独立自尊を問う姿勢だと説きました。“今、与えられているものは正しいのか”と、自ら問い質し、考えられる医療者をめざしてもらいたいですね。



中央手術室 看護師 宇野 拓哉



放射線技術科 診療放射線技師 藤原 健



栄養管理科 管理栄養士 畑 勝智



健診課 事務 安藝 行彦



共育・育成サポートセンター 事務 橋本 千波





地方独立行政法人 堺市立病院機構

堺市立総合医療センター

SAKAI CITY MEDICAL CENTER